『その子』。

ポルナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『その子』。

【Ｎコード】
Ｎ３８４４Ｐ

【作者名】
ポルナ

【あらすじ】
「ぼく」は、毎日帰り道のバス停で、名前もしらない「その子」とおしゃべりする時間が好き。
だって「その子」はスッゴく可愛いんだ。

学校からの帰り道のバス停に、いつもその子はいる。

その子は、いつも古びたベンチに座り空を見上げている。

僕は毎日その子のとなりにすわって、いろんな話をするんだ。

……といってもその子は無口だから、ほとんど僕が一方的にその日あったことを話すだけなんだけどね。

その子は空を見上げながら僕の話を聞き、時々相づちをうちながら可愛い笑顔を見せてくれるんだ。

その子はどこに住んでいるのかも、
歳も、
名前もわからない。

……わからなくていいんだ。

ただ、その子のとなりにいるとなんだか落ち着くし
あったかい気持ちになるから、

…僕は毎日、日が沈むまで
そこにいるんだ。

――ある、

雨がザアザア降って

風がビュウビュウ吹く日。

僕は

かさが飛ばされそうになるのをおさえながら

いつものバス停についたけれど、

その子はいなかったんだ。

ただ、

古びたベンチや

うすっぺらい板張りの屋根が、

風でガタガタ音をたててた。

どうしたんだろう。

その子は僕が中学生になってからこのふた月、

毎日かならずいたのに。

どうしたんだろう。

――あの日から、

ひどい天気だったあの日から一週間。

その子はずっといないまんまだ。

僕がバス停につくたびに、可愛い笑顔を見せてくれたあの子。

毎日、相づちをうちながら僕の話をきいてくれたあの子。

…どこか、とおくに行っちゃったのかな。

――梅雨が明けて、
ひさしぶりに気持ちのいい晴れの日。

僕は「今日もいないんだろな」と思って
バス停を通りすぎようとしたけれど、

――そこにはまた、

あの子がいたんだ。

……また僕に、
その笑顔を見せてくれたんだ。

その日またその子のとなりにすわって
いろんな話をして、
夕日に空がそまり始めたころ、

僕は

ずっと言おうとしてたけど
言えなかったことを

はじめて言った。

『君さえよかったら――

――僕といっしょに、

暮らさない？』

……その子は少しキョトンとした表情になったあと、

いつもの笑顔になり

その口をひらいた。

『ニャア～』

僕はそれを肯定とうけとめて
その子を抱き上げ、

伝わってくるぬくもりを感じながら
帰り道を歩いていった。

……とても、

夕日がきれいな日だった。

（後書き）

もし読んでる途中で『その子』が「人間ではないな」と感づいちゃったら、僕の負けです（笑）
（気づかなかったからといって僕の勝ちというわけではありませんが）

その方は「どこでわかったか」教えていただけると嬉しいです。
参考にしますので…m（＿＿）m

それ以外の方からも感想待ってます（＾＾ゞ

読んでいただきありがとうございました～（＾＾）ノシ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3844p/

『その子』。

2010年12月14日19時43分発行